



矢野彦太

胆のう炎について

胆のう炎とは

胆のうは肝臓の右下にある臓器で、肝臓で作られた胆汁という消化液を一時的にためています。食事が刺激となって収縮し、胆汁は主に脂肪の消化を助けるために胆のう管と呼ばれる管を通して十二指腸へ流れていきます。

胆のう炎とは胆のうに炎症が生じた状態です。胆のうがむくんで腫れ、炎症の進行とともに胆のうの壁が壊死していきます。

症状

初期には上腹部の不快感や鈍痛で、炎症の進行とともに右季肋部痛(右の肋骨の下あたり)になり、次第に激痛になります。

原因

胆のう炎のほとんどは胆石(胆のうにできる結石)が原因であるといわれており、胆汁の通り道である胆のう管に胆石が詰まることで起こります。ただ、胆石が詰まっただけで炎症を生じることはあまりなく、その上で細菌に感染したり、膵液が胆のうに逆流したりすることで引き起こされます。また、胆のうの奇形や捻転(胆のうが回転して入り口部分がねじれてしまうこと)、胆のうの血行障害、周囲にある臓器の炎症、腫瘍による胆のう管の狭まり、寄生虫、膠原病、アレルギー反応などが原因になることもあります。

診断

腹部超音波検査や腹部CT検査などと血液検査によって診断されます。血液検査で白血球数の増多、CRP陽性というような炎症反応が陽性になり、腹部超音波検査やCTでは胆のうの腫れや胆のうの壁の厚みが観察されることなどが診断の決め手になります。

治療

初期治療の後に胆のう摘出術が行われますが、緊急手術や緊急ドレナージ術が行われることもあります。初期治療としては、絶食と輸液、抗菌薬や鎮痛剤の投与などがあります。急性胆のう炎に対する胆のう摘出術は、症状が起こってからなるべく早い時期に手術を行うこと(早期手術)が推奨されていますが、重症度や合併する病気などの理由により、症状が軽快してから待機的に手術を行うこともあります。手術は一般的には腹腔鏡で胆のう摘出術を行います。炎症が強い場合などでは開腹手術を選択することもあります。

日本では人口の約10%の人が胆石を持っているといわれています。胆石そのものは遺伝する病気ではありませんが、体質は受け継がれるので、食習慣や生活習慣が似かよっている家族で何人も胆石を持っているということもあります。症状を自覚したら早めに医療機関を受診することをお勧めします。

